

ささえる力

Power

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

土木女子

～土木の世界は無限大～

“ドボジョ”と呼ばれたり、今何かと話題の土木女子。もちろん水資源機構にもいる。今回は、土木の世界、そして水資源機構へあこがれを持って飛び込み、現在、ダム建設の現場で活躍する土木女子・諫山亜依に密着した。



小石原川ダム建設事業位置図

こしわらがわ
小石原川ダム建設事業は、(1)洪水調節、(2)流水の正常な機能の維持(異常渇水時の緊急水の補給を含む)、(3)新規利水を目的として、福岡県の中南部・朝倉市において、筑後川水系小石原川の既設江川ダムの上流に小石原川ダムを建設するとともに、同水系佐田川から江川ダム貯水池までの導水施設を建設するものです。

Profile

朝倉総合事業所(小石原川ダム建設) 第二調査設計課

諫山 亜依 Ai Isayama

平成16年水資源機構入社。荒川ダム総合事業所(埼玉県)の滝沢ダム、大山ダム建設所(大分県)で管理移行へ向けた設計業務に従事。国際業務の経験も豊富で、日本水フォーラムで国際会議等の運営や総合技術センター国際グループで海外からの研修生の受け入れを担当。平成26年4月より現職。

ヘルメット、作業着へのあこがれ

「ヘルメット・作業着姿がかっこよく見え、あこがれていました。」土木の道を志した動機を、諫山はそう語る。現場に勤務する現在は、「作業着があるので、職場に着ていく服で毎朝迷わずにラクです(笑)」と、女性の本音もポロリ。

なぜ水資源機構を志望したのか。「専門の土木工学



を生かせることと、憧れていた世界に近づける職場だったことが一番の理由です。それと、いろいろな土地で働いてみたいという思いもありました。機構は全国に事務所があり、様々な地域で仕事ができるのでおもしろいです。」と微笑む。

「職員は全国から集まっています、たくさんの個性が発揮されていると感じます。仕事でもプライベートでも、職種の垣根無く話せるところが魅力です。」と話す。

男性職員が多い中であって、女性職員にとっての職場環境を尋ねると、「女性が少ないと意識したことは特にはないです。」と頼もしい答えが返ってきた。「職場は誰にでも気軽に相談できる雰囲気、すてきな仲間恵まれていると感謝しています。」と語る。

機構に入社してみると・・・

水機構に入社して約10年。これまでダム建設所や湖沼管理所での業務などに携わってきた。現事業所で7つめの職場となる。

“土木”という、一般的には、施設など構造物の設計や工事といったイメージが強いかもしれないが、諫山がこれまで主に担当してきた仕事は少し違う。「例えば、ダムをどのように動かしていくかというルールづくりや、ダムからの放流をお知らせする放流警報区間の検討といったことをやってきました。」

これらは施設の設計や工事とは異なり、いわゆる“モノ”として形に残るものではない。しかし、建設された施設を適切に管理し、施設の目的を安全に達していくために不可欠なものであり、諫山はとてもやりがいを感じている。「土木の世界に入ったきっかけは単純にヘルメット・作業着姿へのあこがれからでしたが、水機構での業務を通じて、土木の世界の奥深さを実感する毎日です。」

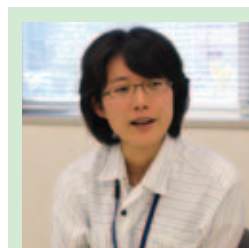
土木の道の探究

諫山の勤務する朝倉総合事業所は、寺内ダム管理と小石原川ダム建設を行っている。現在、諫山は小石原川ダム建設の取水・放流に係る施設設計及び工事発注を担当している。



施設の設計等は今まであまり経験がない分、多くのことを学びながら必死で取り組んでいる。「新しいことばかりで日々新鮮です。できる限り視野を広くし、多角的に物事を捉えるように心がけています。」

ダム建設の現場で忙しくも充実した日々を送る諫山。次にやりたいことを尋ねると、「未経験のダム管理をやりたいです。」とのこと。土木の道の探求はまだ続く。



散歩が一番のリフレッシュ法だという諫山。「秋だとキンモクセイの香りや虫たちの奏でる音色などを感じながら歩いているとホッとします。」とのことで、五感で四季を感じるなかかなかの自然派♪

土木の道を目指す女性にメッセージ

「水資源機構は楽しく仕事ができる職場です。是非一緒に働きましょう。お待ちしております！」